

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 15 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520487

研究課題名（和文）

仮名成立史から見る万葉集仮名書歌巻の孤立性と平仮名への連続性の研究

研究課題名（英文）

A study on a use of kanji for Kana in “Manyo-syu”, from the view of the establishment of Hiragana.

研究代表者

乾 善彦 (INUI YOSHIHIKO)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：30193569

研究成果の概要（和文）：万葉集における漢字の用法としての仮名は、近年の一次資料の増加によって、古代の文字生活の一部に過ぎず、高度な位相における文学的な側面の強いことが指摘されてきた。本研究では、万葉集における仮名書歌巻の仮名使用の実態を細かく調査し、これと訓字主体歌巻、記紀歌謡、その他の上代文献、そして一次資料を網羅した仮名使用の実態と比較することで、記紀歌謡、万葉集の高度な仮名使用の背後に、基層の仮名とも呼べる、時代差、資料差をこえて汎用性の高い仮名字母群の存在を明らかにした。さらに、それを平安時代初期の仮名資料と比較することで、基層の仮名は、平安時代に成立する平仮名の字母とも共通性が高いことを指摘し、平仮名成立の基盤が、木簡や正倉院文書といった、日常の仮名使用に連続するものの、万葉集仮名書歌巻の仮名使用も、それと基盤を同じくするというを明らかにした。また、漢字の表音用法は朝鮮半島に由来しながら、朝鮮語において仮名文字が成立しなかった背景には、日本語の単純な開音節構造は、一字一音節（一モーラ）の仮名の体系を作り出すのに文字数が少なくて済むのに対して、朝鮮語の閉音節構造は、一字一音節の仮名文字の体系を作り出すには、一音節二文字を必要とする場合が生じて、体系化には不向きであったという、両語の音節構造の違いがあることを指摘した。

研究成果の概要（英文）：The use of Kanji for Kana in “Manyo-syu” is very different from the ordinary use in ancient public official. This study disclosed that Manyo-syu have a basic use and advanced use of Kana, and basic use connect to Hiragana. The kana-use of Kanji derives from Korea, but Kana-character don't established in Korea. This is derived from the difference of structure of syllable between Korea and Japanese.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語史

1. 研究開始当初の背景

近年の7・8世紀木簡の大量出土によって、それまで記紀・万葉集を中心として語られてきた文字使用とは異なる、古代官人の日常の文字生活の状況が明らかになってきた。これまで文字・表記研究の中心資料だった記紀・万葉集の文字用法は、いわばハレの場の高度な文字表現であり、それは日常生活における文字法とはかけ離れたものというわけである。つまり、記紀・万葉集は古代官人の文字生活の一部分でしかないことになり、古代の文字生活の片隅に追いやられることになった。

しかし、一次資料によって、たしかに日常の文字生活が明らかになったものの、それと記紀・万葉集の文字用法、とくに仮名の用法が、それらとまったくかけ離れているのかどうかは問題であり、そこに万葉集と平安時代の平仮名との連続・非連続を考える余地があった。

平安時代に平仮名が成立するうえで、万葉集の仮名書歌巻に用いられた仮名は、どれほどの共通性があり、どのように平仮名につながっているのか、あるいは、まったく別のものなのかは、慎重に考察すべき事柄としてあった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、万葉集の仮名書歌巻の仮名使用を、さまざまな文献と比較し、それを仮名成立史の中に正当に位置づけることで、平仮名成立の過程にも重層性のあることを指摘し、仮名成立のシステムを明らかにするものである。

①記紀万葉、木簡、正倉院文書その他の古代仮名資料における仮名使用の重層性の共通点と相違点を整理するこ

とで、そこに通底する仮名の存在を明らかにする。

②そしてそれを朝鮮半島の漢字表音用法と比較することで、音と文字との対応システムを明らかにする。

③さらに、平安時代平仮名資料を整理することで、そこにも重層性のあることを明らかにする。

以上によって、万葉集仮名書歌巻の仮名と平仮名との連続性と非連続性とを明らかにする。

3. 研究の方法

古代の仮名資料における、使用字母の実態を、それぞれの資料の性格によって整理する。万葉集においては、巻ごとに使用字母を調査し、さらに、歌群・作者によっても整理する。また、仮名書歌巻と訓字主体歌巻とでの差異に注目して、それぞれに共通の仮名字母を抽出する。さらに、記紀歌謡その他の上代文献と、木簡・正倉院文書の一次資料とを加えて共通の仮名字母群の存在を明らかにした。ただし、この際、地名・人名など固有名を表記に用いられるものは除外する。そこには極めて多様な用法があり、一回的、個別的な使用がみとめられるからである。

次に、同様にして、平安時代初期の仮名資料とも比較対照する。初期仮名資料として、平安初期訓点資料、草仮名発生期の資料群、平安中期和文資料、さらに、平安中期、後期の和歌資料を選定し、それぞれの資料性を勘案しながら、平仮名成立に向かう仮名字母群と、文学的に高い位相に属する仮名字母群とを分けて考えることによって、万葉集の仮名書諸巻の仮名の用法の、孤立性と他文献との共通性を浮かび上がらせることにした。

4. 研究成果

以上の研究によって、次のことを明らかにした。

- ①木簡の歌表記に用いられた仮名には、記紀万葉とは異なる点が多く、むしろ、平仮名に通じる点がある。(論文⑪⑫、発表①⑤⑥)
- ②古代の仮名の用法は、歌の表記と地名等固有名詞の表記とでは、多様性に差があり、一律にはあつかえない。固有名詞の表記方法は極めて多様であり、個別、一回的な用法もまみられる。しかし、歌の表記だけを取り出せば、そこには万葉集から平仮名への連続的な部分も指摘することができる。それを基層の仮名ととらえた。(論文①③⑧⑨⑪、発表④⑤⑥)
- ③平安時代の仮名を考える場合には、和文体の資料性について考えなければならないが、初期平仮名資料には、古代の変体漢文および漢文訓読の影響が大きく、その点で、仮名の用法だけでなく、表記体を考えても、古代の変体漢文資料と平安朝和文の間には、連続性をみとめることができる。(論文④⑩、発表⑥)
- ④古代朝鮮半島とのかかわりでいえば、同様に漢字音を利用した表音用法をもちながら、朝鮮語はついに漢字から独自の文字を創出しなかったのに対して、日本語において仮名が成立したのは両語の音節構造の違いであると考えられる。(論文②⑥、発表①⑤)
- ⑤ことばと文字との対応において、古代の漢字の用法の多様性がもたらすものの本質がどこにあるかは継続して考えられなければならない。そこに、文字としての仮名の成立の要請がみとめられるならば、今後、固有名まで含めた古代資料の再検討が必要である。(論文①③⑤⑦⑨、発表①④⑤)
- ⑥なお、本研究成果については、報告書『仮名成立史から見る万葉集仮名書歌巻の孤立

性と平仮名への連続性の研究』に詳細を記述した。これは、既発表論文を【文字とことば】【歌木簡】【固有名と仮名】【表記体の変換】【付録・平仮名への道程】に分類し、一覧したものであり、さらに、未発表だった古代仮名字母の対照表を付したものである。これによって、本研究の全体像が一覧できるので、参照していただきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

- ①古事記の固有名表記をめぐって— 一神名、人名における「高」をめぐって— 乾善彦 古代学 4 号 (奈良女子大学古代学学術研究センター) 査読有 11-16 頁 2012.3
- ②日本における新出資料の増加と既存資料の見直し—新出資料から見えてくるもの— 乾善彦 上代文学 106 号 査読有 18-26 頁 2011.4
- ③正倉院文書請暇解の訓読語と字音語 乾善彦 『国語語彙史の研究三十』(和泉書院) 査読有 33-47 頁 2011.3
- ④『三宝絵』の三伝本と和漢混淆文 乾善彦 『言語変化の分析と理論』(おうふう) 査読無 89-101 頁 2011.3
- ⑤古代語における文字とことばの一断章 乾善彦 『国語文字史の研究十二』(和泉書院) 査読有 37-50 頁 2011.3
- ⑥日本語と中国語の接触がもたらしたもの 乾善彦 日本語学 29-14 査読無 45-54 頁 2010.11
- ⑦「歌木簡」の射程 乾善彦 文学・語学 196 査読有 81-89 頁 2010.3
- ⑧地名起源説話と地名表記—『播磨国風土記』「安相里」をめぐって— 乾善彦 『国語語彙史の研究 二十九』(和泉書院) 査

読有 53-65 頁 2010.3

- ⑨幕末国学者の漢文理解—関大本播磨国風土記から考えられること— 乾善彦 アジア文化交流研究第5号 査読有 69-76 頁 2010.2
- ⑩表記体の変換と和漢混淆文 乾善彦 『古典語研究の焦点』(武蔵野書院) 査読無 71-90 頁 2010.1
- ⑪歌表記と仮名使用—木簡の仮名書歌と万葉集の仮名書歌— 乾善彦 木簡研究 31号 査読有 235-244 頁 2009.11
- ⑫仮名の位相差—宮町遺跡出土木簡をめぐって— 乾善彦 『万葉集の今を考える』(新典社) 査読無 86-96 頁 2009.7

[学会発表] (計7件)

- ① 乾善彦 古代の仮名使用と万葉歌木簡 2012.2.22 韓国 第43回口訣学会 ソウル大学校
- ② 乾善彦 万葉歌木簡と仮名書き歌 2011.11.6 「もう一つの万葉の里 木津川市から」記念シンポジウム 於山城総合文化センター
- ③ 乾善彦 播磨国風土記受容の一斑 2011.9.10 風土記研究会第9回研究発表会 於宮崎県立看護大学
- ④ 乾善彦 古事記本文中の仮名と万葉集訓字主体表記歌巻の仮名—固有名表記と音訓意識— 2011.8.21 2011年度奈良女子大学若手研究者支援プログラム シンポジ

ウム『古事記と万葉集』 於奈良県立万葉文化館

- ⑤ 乾善彦 日本における新出資料の増加と既存資料の見直し—新出資料から見えてくるもの— 2010.10.30 上代文学会秋季大会シンポジウム 文字文化を問い直す—新出出土資料からみる百済・新羅・倭— 於お茶の水女子大学
- ⑥ 乾善彦 木簡の歌と万葉歌—ウタの書記と表記体— 2009.11.15 上代文学会秋季大会研究発表会 於慶応義塾大学三田キャンパス
- ⑦ 乾善彦 幕末国学者の漢文理解 2009.10.3 CSAC 第13回研究集会・第6届日本漢学国際学術検討会 於関西大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

乾 善彦 (INUI YOSHIHIKO)
関西大学・文学部・教授
研究者番号：30193569

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし